浮石

○按ズルニ、皮をほしてトハ、熟セル絲瓜ヲ取リテ、水或ハ泔水ノ中ニ漬ケ置キ、其種子ト外皮ヲ去リテ日ニ曝シ、後ニ用ヰルヲ云フナリ、故ニ皮トハ云ヘドモ、畢竟其中ノ纖維ヲ用ヰルナリ、

〔倭名類聚抄一巖石〕浮石　交州記云、體虛而輕、和名加留以之

〔書言字考節用集一乾坤〕浮石（カルイシ）一名水花、本草、海中有二浮石、輕虛可以磨脚、

〔諺話浮世風呂前編大意上〕總て錢湯に五常の道あり、○中略糠、洗粉、輕石、絲瓜皮にて垢を落し、石子で毛を切るたぐひ則智也、

〔錢湯來歷〕湯語教

無盡呪輕石ヲ盜隱　借着物更以不返

○按ズルニ、錢湯ノ輕石ヲ懷中シテ、賴子講ニ出席スレバ、必ズ當籤シテ金ヲ得ト云フ諺アリシ故ニ、カク云ヘルナリ、

河藥

〔江家次第十五〕大嘗會

卯日、○中略主殿寮供御湯、用二東戸一

奉二仕御湯殿之人、殿上四位一人、六位一人、並觸二山陰卿子孫之人一、於二女官幄一可解二改裝束一、而於二釜殿一脫之人有之云云、○中略

承保供二御河藥一、入二土器一、居二折敷一、

〔筆の靈後篇五十四〕御河藥とは、江家次第考十五卷に、御河藥、白米也、自二御厨子所一進之、入二土器一、居二四足一云云などもあり、さて河藥と書くは、借字にて、實は皮藥なり、白米を水に漬して、その水を天皇の御膚にぬり給ふにて、皮膚をしてうつくしからしむる藥なり、薰藥と心得たる說あるは、いみじきひがことなりと、小山田翁清○與いはれたり、

〔侍中群要四〕御浴殿